

2018 年度（平成 30 年度）
福山大学 FD・SD 活動報告書

福山大学大学教育センター
教育開発部門

目次

はじめに	1
1. 第1回 FD・SD研修「平成29年度教育振興助成金対象研究の成果発表会」	2
2. 第2回 FD・SD研修「第5回福山大学教育改革シンポジウム」	3
3. 第3回 FD・SD研修「Webシラバス入力項目～記載上の留意事項～」「実務家教員とのシラバス作成」「アセスメントポリシーの策定」とアセスメントポリシーに基づいた「アセスメントの実施」について」	- 10 -
4. 第4回 FD・SD研修「大学とIR～現状と課題～」	- 13 -
5. 第5回 FD・SD研修「地域連携重視の福山大学プランディング戦略」	- 15 -
6. 第6回 FD・SD研修「ハラスマント自己チェック」	- 17 -
7. 平成30年度福山大学学部・学科・大学院研究科のFD・SD活動報告	- 26 -

はじめに

教育基本法はその第 9 条で教員の資質・能力の向上について定めている。曰く、「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」「前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない。」と。学校教育法のいわゆる 1 条校たる大学の教員が、ここにいう教員に含まれないはずはない。とりわけ、大学を取り巻く内外の環境の劇的な変化の中で教員に求められる資質・能力が高度化し拡大している状況の下、それに対応しうるための研修の重要性は日増しに高まっていると言っても過言ではない。平成 25 年 5 月 28 日に教育再生実行会議はその第三次提言「これからの中等教育等の在り方について」の中で、①グローバル化に対応した教育環境づくりを進める、②社会を牽引するイノベーション創出のための教育・研究環境づくりを進める、③学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する、④大学等における社会人の学び直し機能を強化する、⑤大学のガバナンス改革、財政基盤の確立により経営基盤を強化する、という 5 つの課題を掲げた。これからの大学教員に求められる資質・能力とは、これらの課題に適切に対処しうる力であろうし、そのための研修機能なし FD (ファカルティ・ディベロップメント) の充実強化がいっそう図られねばならない。

本学では、授業内容・方法の改善、教員の資質・能力向上等、大学教育の質的な向上を目的とした組織的な取り組みとしての FD の重要性が早くから認識され、十数年前から研究・研修活動が続けられてきている。当初は、教務委員会および自己評価委員会が中心となって企画・運営されてきたが、平成 21 年 4 月に大学教育センターが設置されると、翌々年の平成 23 年 (2011) 以降は、センターの教育評価・改善部門（平成 26 年度より教育開発部門に改称）がその役割を引き継ぎ、今日に至っている。そのため、「大学教育センター規則」の第 3 条には、担当業務 10 項目のうちの第二として「教育内容・教育方法の改善に係る全学的な企画、推進、組織的な研修 (FD) に関する事」と明記されている。同規定に基づき、現在、全学的な取り組みとして、大学教育センター教育開発部門が中心となって、FD 活動を実施している。また、これらの FD 活動については職員の参加も奨励しており、SD (スタッフ・デベロップメント) 活動の一部も兼ねてきた。

ところで、規模や内容など大学や学部・学科の特色が異なれば、FD・SD のニーズが異なるのは明らかであり、大学全体としての FD・SD の取り組みの他にも、各学部や学科単位で研修活動が行われることが望ましい。こうした観点に立って、本学では全学的な FD・SD に加えて、学部・学科ごとにも FD・SD の諸活動を展開してきている。

本報告書は、平成 30 年度に本学で実施したこれらの FD・SD 活動の記録をまとめたものである。

平成 31 年 3 月 31 日
大学教育センター センター長 大塚 豊
同 教育開発部門長 佐藤英治

1. 第1回 FD・SD 研修「平成29年度教育振興助成金対象研究の成果発表会」

平成30年6月20日(水)、平成30年度第1回FD・SD研修会が大学会館3階ICT教室「CLAF」にて開催された。今回は、平成29年度の教育振興助成金対象研究の成果発表会で、平成29年度における本学教員の教育開発への取り組みと成果(9研究15演題)について情報共有を行った。

1. 特色ある教育方法開発助成

No.	研究者名 (代表者)	学科	研究テーマ
①	足立 浩一	国際経済	経済女子サポートプロジェクトのためのメンター制度導入
②	水上 雅晴	海洋	学芸員養成課程履修生による博学連携教育におけるICT活用プログラムの構築
③	山之上 卓	共利センター	福山大学におけるICT活用による教材開発と学修支援 - 平成27～28年度 同プロジェクトの継続 - ③-1 : ICTを活用した共通教育用科学教材の開発と運用方法の検討 (共同利用センター 鶴崎健一、大学教育センター 地主弘幸) ③-2 薬学部新入学生のCerezoを用いた基礎学力分析 (薬学科 石津隆、堤広之) ③-3 生物工学科におけるICTを活用した継続的な学修支援の実施 (生物工学科 太田雅也、久富泰資、生物工学科全教員) ③-4 eポートフォリオを活用したLTD学習法の開発 (機械システム工学科 内田博志) ③-5 心理学検定の合格率を向上させる受講者参加型オンライン学習教材の開発 (心理学科 宮崎由樹)
④	津田 将行	大教センター	BINGO OPEN インターンシップの発展的プログラム開発のための基礎的研究
⑤	Jason Lowes	大教センター	分野の難しさが、重要な英語試験の妥当性に与える影響について
⑥	広瀬 雅一	薬	改訂コアカリに準拠した薬局実務実習のための薬局間連携方策の構築
⑦	小原 友行	人間	大学教育における新聞や博物館を活用したアクティブラーニング型授業法の開発

2. 学生の参加する社会連携活動助成

⑧	佐藤 圭一	建築	「地域遺産」としての備後表、明王院、別所砂留の保全と継承
---	-------	----	------------------------------

3. 学科横断型教育プロジェクト

⑨	香川 直己	工学部	未来工学教育プロジェクト(課外型活動) ⑨-1 「E T ロボコンに挑戦」 ⑨-2 「学生フォーミュラに挑戦」 ⑨-3 「ゲーム制作によるソフトウエア開発工程体験」
---	-------	-----	---

当日は、138名もの教職員が出席した盛況なものとなった。ポスターを展示したもの、映像を用いたものなどさまざまな形式での発表が行われ、活発な討論や意見交換が行われた。今回の FD・SD 研修が、各学科やセンターにおける今後の教育改善に反映されること、新たなアイデアの萌芽となることが期待される。



発表と討論の様子

2. 第2回 FD・SD 研修「第5回福山大学教育改革シンポジウム」

平成30年9月14日（金）、第5回福山大学教育改革シンポジウムが1号館大講義室（01101教室）で開催された。本年度の教育改革シンポジウムは「言語教育を考える」をテーマとした2部構成で実施され、141名の教職員が参加した。また、本年度のシンポジウムは、大学教育センター中尾佳行教授が取りまとめ役となり、企画運営がなされた。

第1部のFD・SD 講演会は、本学教員7名による言語教育の現状と課題についてパネラー報告が行

われた。第2部では、パネラーおよび全参加者を含めた総合討論が行われた。各パネラーによる講演要旨と講演・討論風景を以下に示す。なお、本報告の内容や写真等は「大学教育論叢」第5号（福山大学大学教育センター、2019年3月）より引用した。詳細は同書を参照されたい。

講演要旨

1 母語教育の現状と言語教育の課題

大学教育センター 准教授 竹盛 浩二

日本語検定の出題要素の中で、語彙力は言葉の力において重要な因子となる。語彙力には、これまでの読書が影響すると言われている。さて、その語彙力を含め3つの要素を学科ごとに見てみると、学科間格差が認められる。これから的学生と、これを教育する各学科教員が、専門内容に照らしてそれをどのように意識して言葉の力を育てていくのか。共通教育の立場から、その契機としての話題を提供する。

2 英語教育の現状

大学教育センター 講師 若松 正晃

平成29年度実施したプレイスメントテストに関する報告を行う。その結果を踏まえ、英語カリキュラムを評価するとともに、専門教育への接続を目指したその思想を再確認する。学部学科において、ひいては福山大学として、今後いかに英語をとらえるのか議論したい。

3 初修外国語教育を考える

大学教育センター 准教授 劉国彬

福山大学の初修外国語教育は、開学当初のドイツ語一つに始まり、現在は中国語、フランス語、韓国語を加えた四カ国語となっている。その中で、中国語の履修者が最も多い。学生は、中国語を勉強して、母語に対する再認識、英語との比較、異文化、考え方について変容が見られる一方、「漢字が書けない」「外国語は難しい」等の声もある。国際社会に通用する若者を育てるため、外国語が苦手の学生に対して修得をどのように高めていくか、教師に問われる課題である。

4 数学という言語

大学教育センター 准教授 小野 太幹

使う言葉の定義や、議論の根拠となる共通概念（公理）を定め、論理を積み上げるという数学の研究方法は、古代ギリシャ時代に確立され、その後記号の役割が発見された。数学において用いられる言葉や記号の定義には厳密性や自然であることなどが求められるが、それらの要求が論理的で高度な議論展開を可能にする。数学という言語の特徴の一端を話題提供したい。

5 理科系での正確な日本語を書く教育

工学部 スマートシステム学科 准教授 関田 隆一

工学系は製品安全の視点から精緻な技術文書作成能力が必要で専門教育が始まっている。医療系はその行為が直接人命に関わるが、文章作成と事故の関係を明らかにした研究が少ない。そこで、医療事故

データの解析により薬剤師の文章作成と事故の関係を論じる。また工学部、薬学部の1年生の文章作成能力を小論文作成により計測した。そのデータの統計解析結果を基に理科系で正確な日本語を書く教育を提案する。

6 言語教育は「メディアと表現」とどのようにつながるか

人間文化学部 メディア・映像学科 准教授 内垣戸 貴之

言語はそもそも「メディア」である。メディアと表現について学ぶ本学科にとって、言語教育は非常に重要なものと言えよう。その一方で「メディア」という言葉の語感からイメージされるのは、多くの場合「非言語的な表現」でないだろうか。そうしたある種のギャップに対し、言語教育をどう位置づけるべきか、学科の現状を踏まえて報告する。

7 学ぶ意欲向上へ向けての問題提起

薬学部 薬学科 講師 大西 正俊

福山大学薬学部では、薬剤師を目指す学生がほとんどである。そのため、大学本来の学位取得ではなく、薬剤師国家試験合格をゴールと考える学生が多い。国家試験の出題基準に『言語』が明確に定められていない中で、いかに言語教育に興味を持たせられるかが6年制薬学部の課題であり、今後、学問としての薬学を発展させるキーとなると考えられる。

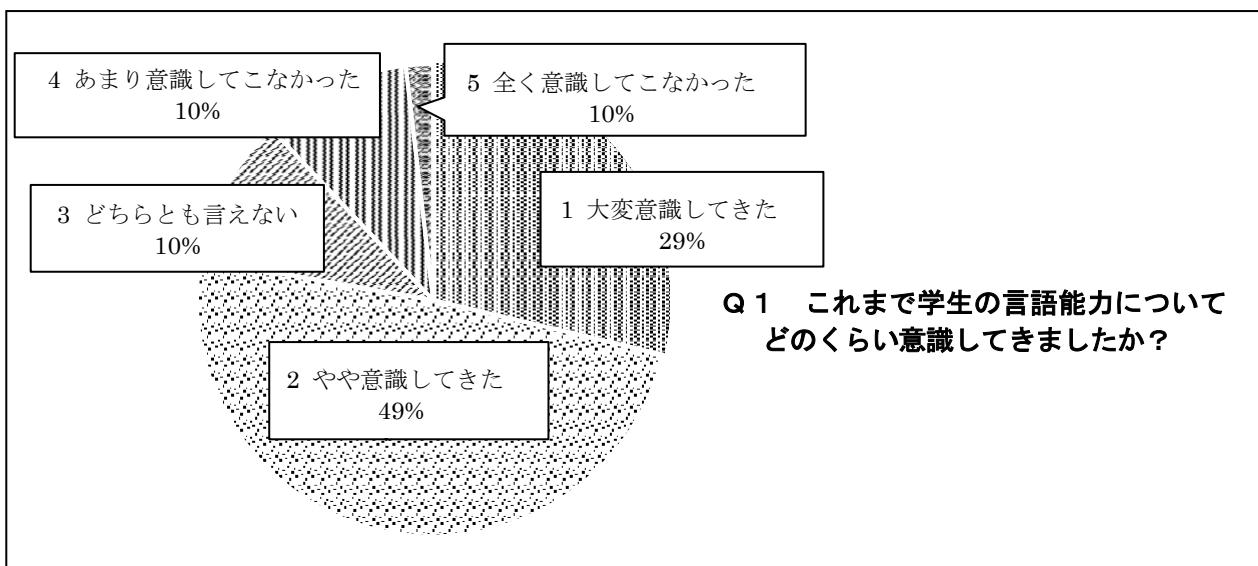
講演風景



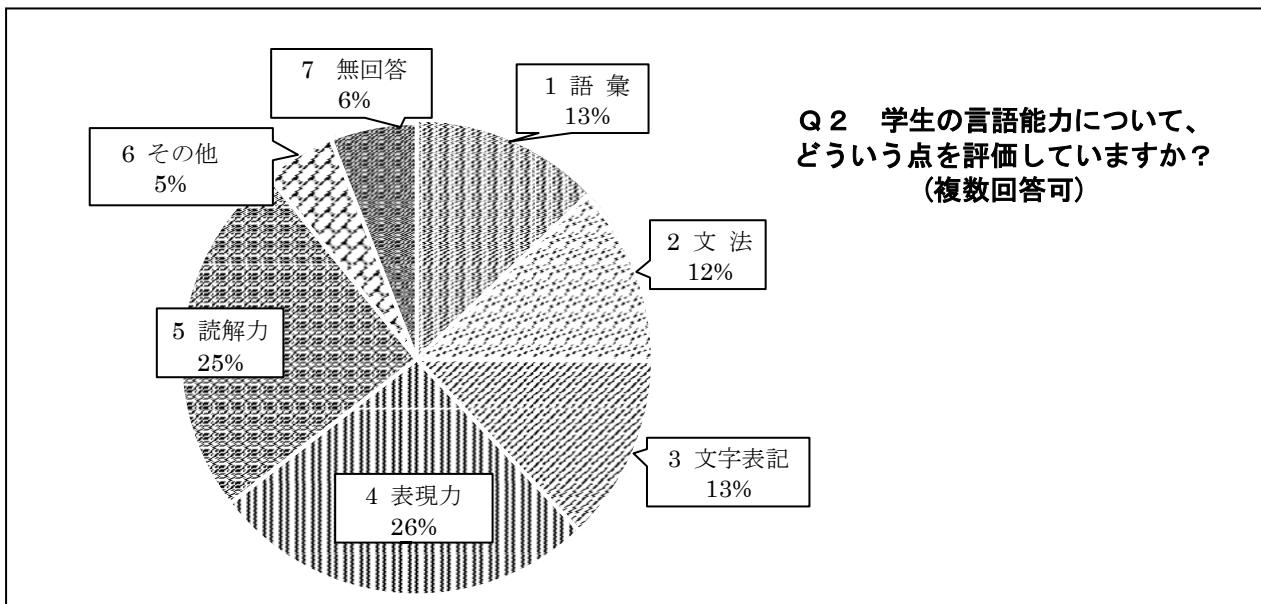


次に、本シンポジウムのアンケート結果（抜粋）を円グラフで示す。教員の「言語教育についての意識」および「今後のシンポジウムテーマの希望」が集約されたものであり、今後の教育改善に活用していきたい。

【1】「言語教育を考える」に関して、問題意識あるいは実践についてお聞きします。

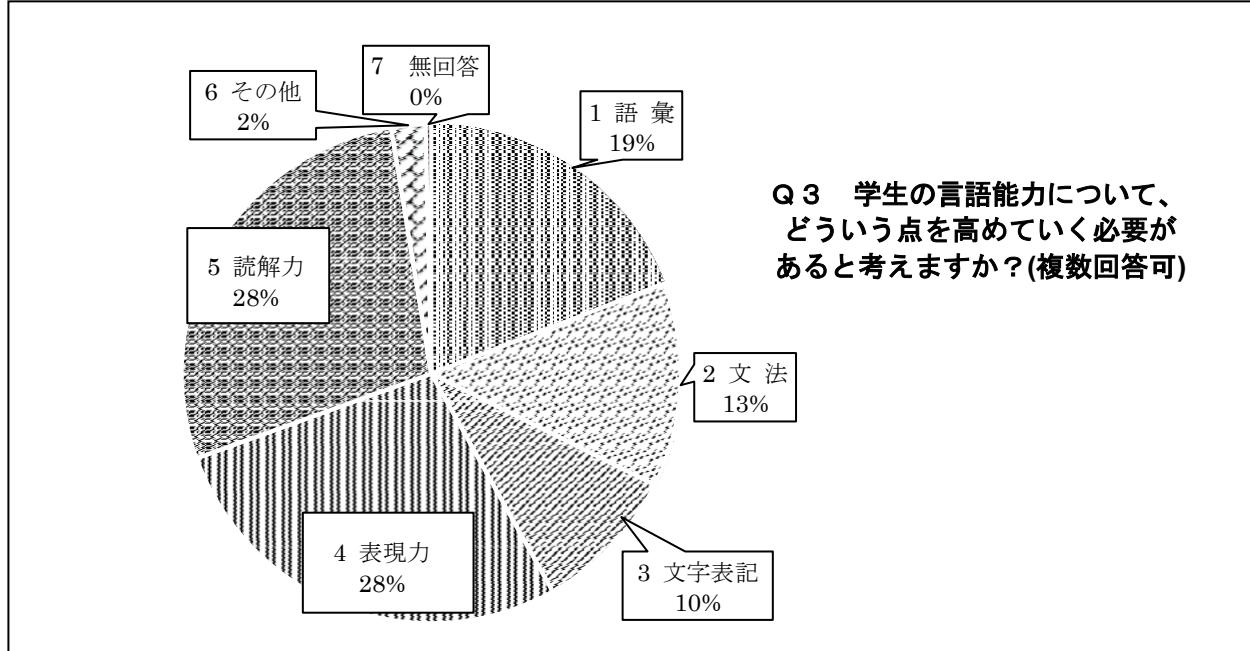


Q 1 これまで学生の言語能力について
どのくらい意識してきましたか？



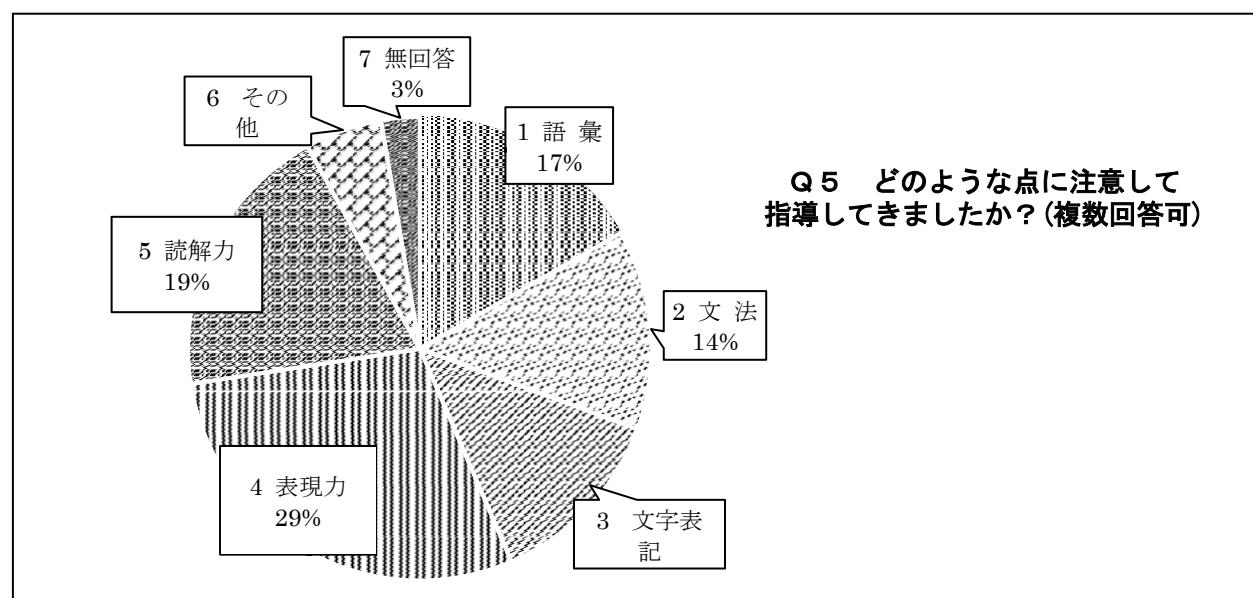
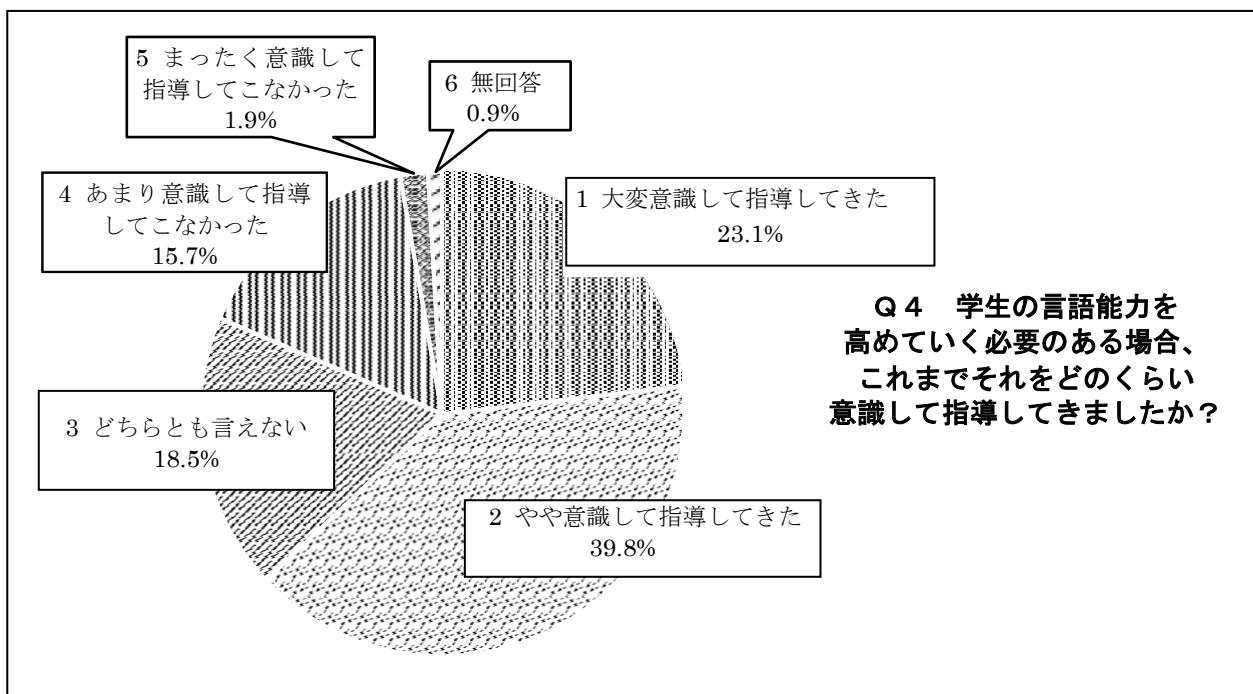
その他

全体的に低い、書こうとする姿勢、何とか表現しようとする姿勢、
分かり易い文章を書く能力があるかどうか、パラグラフ・ライティング、
記述力・論理性、聴きとる力、構成



その他

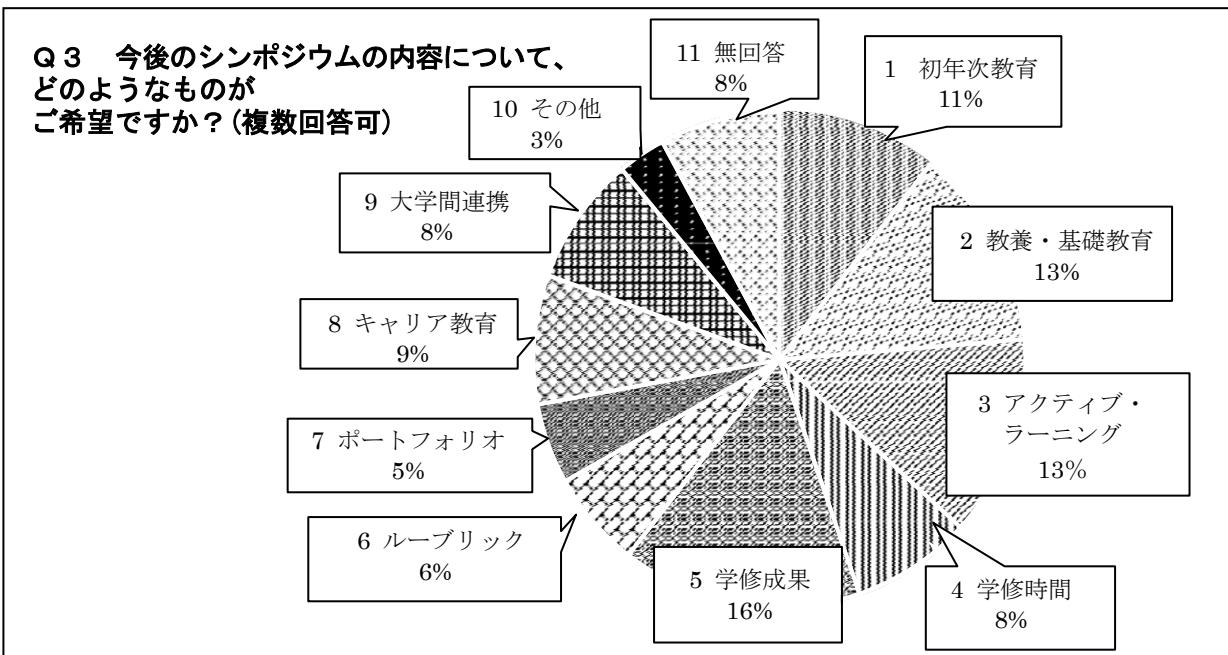
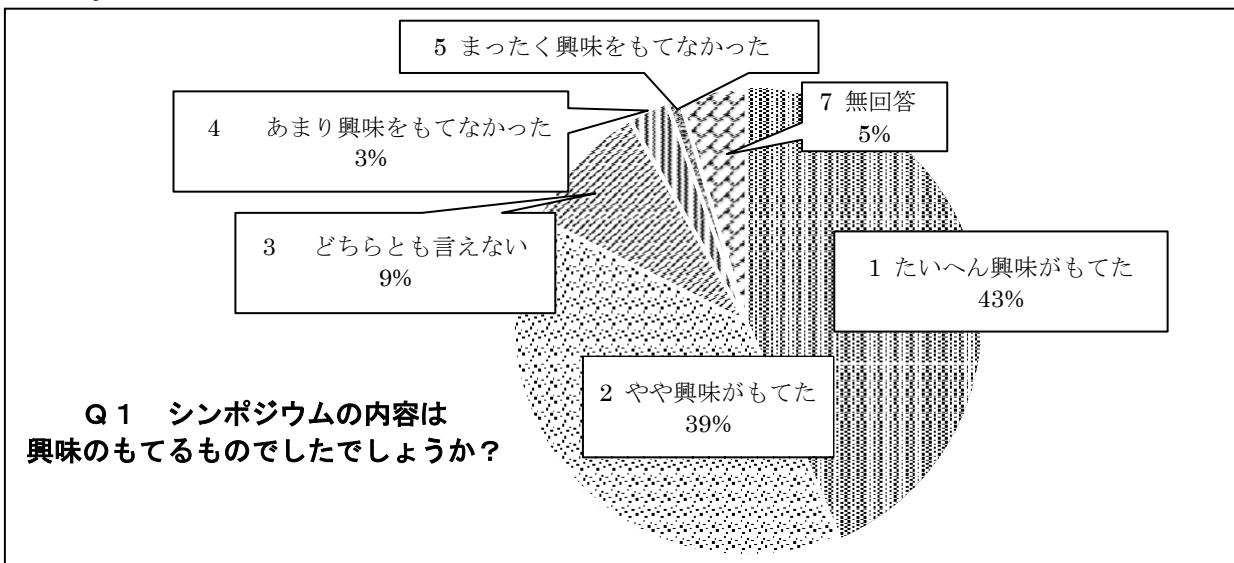
聴きとる力、論理性、それぞれの学生によって異なるので難しい
文章を読んだとき誤った解釈をしない、文章を書くとき誤った解釈をされない能力
文章の統一性



その他

アカデミックライティング全般、文によって正確に情報を記録する力、卒論、指導する機会がない、レポートなどを書かせたり、演習問題を解かせたりする際には、「手本となる」設問の文章や模範解答の文章を「わかりやすい文章」とすることで、学生にとって学習しやすい配慮をしておく、文書作成、記述力、文章の構成、聞きとる力、他者の言葉を聞く力

【2】今後、講演会・シンポジウムを企画する際の参考にしたいと存じますので、引き続きアンケートにご協力ください。



本シンポジウムでは、さまざまな専門フィールドにおける言語教育に関して、現状説明、問題提起、提言が行われ、それらを基に全体討論が展開された。大学の使命は、ディプロマポリシーとして設定された資質・能力を学生に修得させることであるが、その資質・能力はまさに言語能力を基盤として成り立っている。大学教員は往々にして教育に対する意識が専門教育に偏りがちになるが、今回、専門教育の基盤となる言語能力に関して問題意識を共有化することができた。教員間の全学的な連携の必要性を確認できるものであった。

3. 第3回 FD・SD 研修「Web シラバス入力項目～記載上の留意事項～」「実務家教員とそのシラバス作成」「アセスメントポリシーの策定」とアセスメントポリシーに基づいた「アセスメントの実施」について

平成30年11月21日(水)、平成30年度福山大学第3回FD・SD研修会が15号館3階大会議室で開催された。今回は2部構成で開催され、第1部では、福山大学教務委員長の石津隆教授から「Web シラバス入力項目～記載上の留意事項～」「実務家教員とそのシラバス作成」について、第2部では、大学教育センター副センター長・教育開発部門長の佐藤英治教授から「アセスメントポリシーの策定」とアセスメントポリシーに基づいた「アセスメントの実施」について」というテーマで講演があり、151名の教職員が参加した。

第1部の石津教授の講演では、Web シラバスの入力項目と各項目の記載上の留意事項の説明があり、学生視点でその授業科目の位置づけ、目的、計画、自己学習内容等がわかりやすくなるよう、詳細かつ明確に記載する必要性について説明があった。シラバスは、学生が授業を受け単位を取得するにあたって必要な情報を網羅する必要がある。例示を用いた説明あり、シラバス作成に大いに役立つものであった。

■ Web シラバス入力項目 ■

① 英文名称
② 授業のねらい、概要
③ ディプロマ・ポリシーとの関連
④ 授業（学修）の到達目標
⑤ 授業計画表
⑥ 修得しておくことが望ましい科目等
⑦ 履修上の注意事項等
⑧ 定期試験
⑨ 成績評価の方法・基準
⑩ 課題に対するフィードバックの方法
⑪ テキスト
⑫ テキストISBN
⑬ 参考書
⑭ 参考ISBN
⑮ 参考URL-書名/説明
⑯ 参考URL
⑰ オフィスアワー

■ 記載上の留意事項 ■

② 授業のねらい、概要

学生が授業の全体像を把握できるよう、授業のねらい（目的・意義）及び授業で扱う軸となるテーマ等を簡潔に記載してください。

【例】

医薬品の生体内での作用を化学的に理解できるようになるために、医薬品の標的および医薬品の構造と性質、生体反応の化学に関する基本的事項を修得する。

(1) 医薬品の標的となる生体分子の構造と化学的な性質：医薬品の標的となる生体分子の基本構造と、その化学的な性質に関する基本的事項を修得する。
(2) 生体反応の化学による理解：医薬品の作用の基礎となる生体反応の化学的理解に関する基本的事項を修得する。

■ 記載上の留意事項 ■

④ 授業（学修）の到達目標

授業を通して身につけることが期待される知識・能力等について具体的に記載してください。

【例】

1 代表的な生体高分子を構成する小分子（アミノ酸、糖、脂質、ヌクレオチドなど）の構造に基づく化学的性質を説明できる。
2 医薬品の標的となる生体高分子（タンパク質、核酸など）の立体構造とそれを規定する化学結合、相互作用について説明できる。

学生を主語とし、「…できる」「…することができる」等のように学習者側の行動（行為動詞）で示してください。

■ 記載上の留意事項 ■

⑤ 授業計画表

各授業回で掲げる内容（テーマ/ヒーラー）における標準

大学設置基準第21条において、「1単位の授業時間は45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とする」ことが定められています。

従って、授業時間外において学生が主体的に行う学修時間（準備学習時間）は、授業時間（1コマ2時間換算）以外の時間となります。

シラバスに記載する準備学習（予習・復習）内容・時間は、学生が主体的に行う授業時間外学修の一部分を具体的に指示するものであるとご理解ください。

■記載上の留意事項 ■

⑤ 授業計画表

グループワーク	ロールプレイ
ディスカッション	調査学習
ディベート	双向型授業
プレゼンテーション	反転授業
フィールドワーク	事前学習型授業
PBL	…など

■記載上の留意事項 ■

⑤ 授業計画表

回	内容	予習	復習
第1回	生体内および医薬品としての複素環化合物及び芳香族性(町支)	複素環を含む生体内物質や医薬品について復習する。【1時間】 複素環の芳香族性について復習する。【1時間】	
第2回	芳香族複素環の求電子置換反応と配向性(グループワーク形式)(町支)	求電子置換反応についてテキストの隣邊事項を予習する。【1時間】	複素環の芳香族求電子置換反応について復習する。【1時間】
第3回	芳香族複素環の求電子置換反応(付加・脱離及び脱離・付加)(石原)	テキストの隣邊事項を予習する。【1時間】	複素環の芳香族求電子置換反応について復習する。【1時間】

■記載上の留意事項 ■

⑨ 成績評価の方法・基準

授業の成果（学修到達目標の達成度）を測定する方法や基準について記載してください。

評価方法・基準が複数ある場合は、その配分率を具体的に明記してください。

【例】中間試験（40%）および定期試験（60%）の結果により評価する。

【例】定期試験（90%）、課題（10%）により評価する。

出席回数を評価に加えることは出来ません。
授業への出席は成績評価の前提であり、加点要素には使用しないでください。

■記載上の留意事項 ■

⑩ 課題に対するフィードバックの方法

授業中に課したレポートや小テスト等に対する学生へのフィードバック方法を記載してください。

【例】提出されたレポートにコメントを記入しCerezoにより返却する。

【例】提出されたレポートは、次回授業時に口頭やプリントにてフィードバックを行う。

【例】採点した小テストを当該学生に開示し、できなかった問題について解説する。

また、実務家教員が担当する授業シラバスの作成法についても解説があった。近年、大学において実務家教員による実践的かつより具体的な教育の重要性が急速に求められるようになってきている。そのため、実務家教員が担当する授業のシラバスにおいては、その旨を正確に記述していく必要性が出てきた。

実務家教員の定義

専攻分野における実務の経験を有し、かつ、高度の実務の能力を有する者（専門職大学院設置基準（平成15年文部科学省令第16号）第5条第3項ほか）

**② 授業のねらい、概要
④ 授業（学修）の到達目標**

例えば、下記のような文言を用いて作成する。

「〇〇での実務経験から得られた△△について……」
 「〇〇に携わった経験から得られた△△について……」
 「〇〇の現場での実践や活動実態に照らして……」
 「〇〇の現場での実体験から得られたデータ・情報に基づき……」
 「〇〇の現場での実践や活動実態に照らして……」

本学における実務家教員の事例

「病院や薬局で薬剤師としての業務に就き、そこで得た知識、技能、実務経験を教員として薬学部学生に教授する。」

同様に、

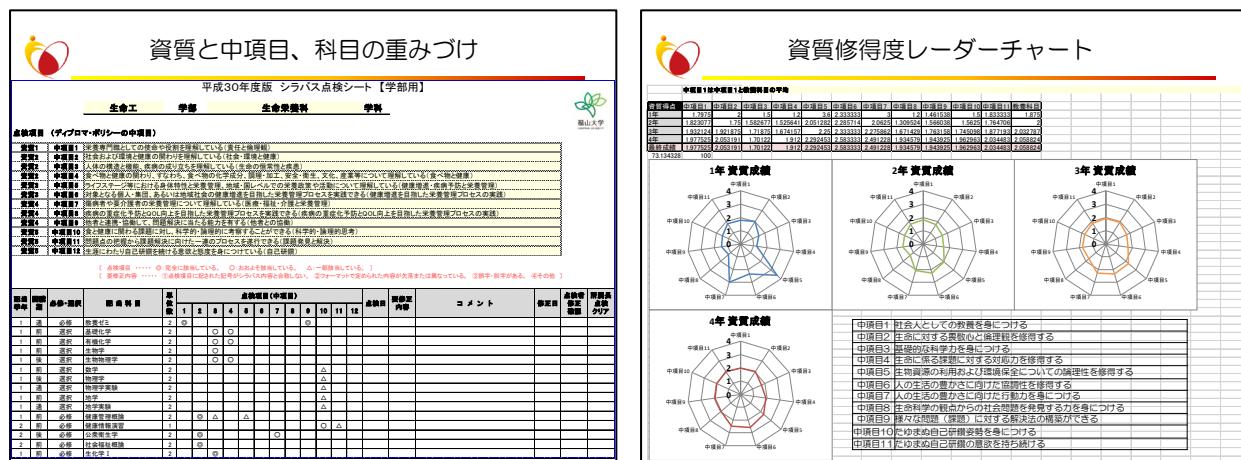
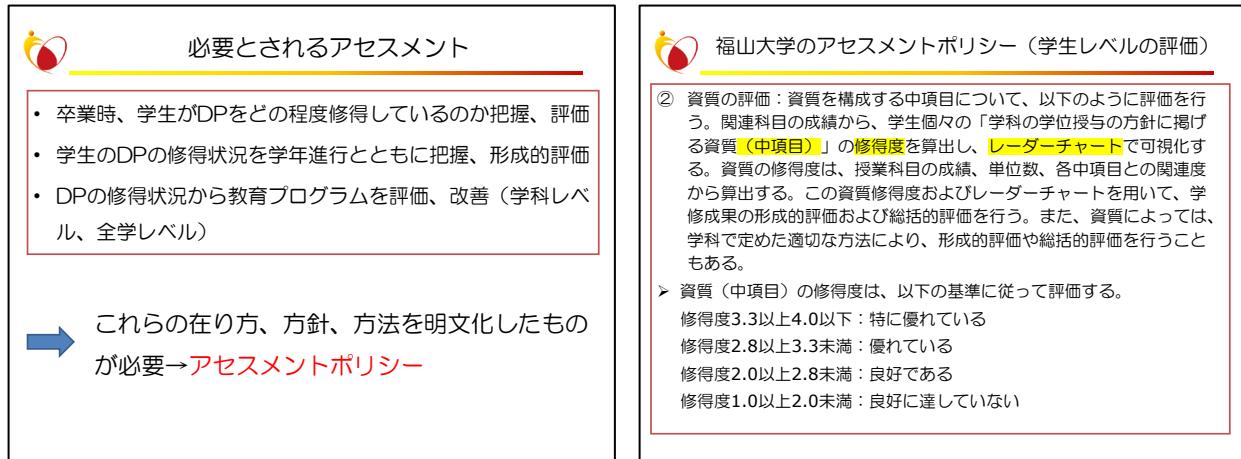
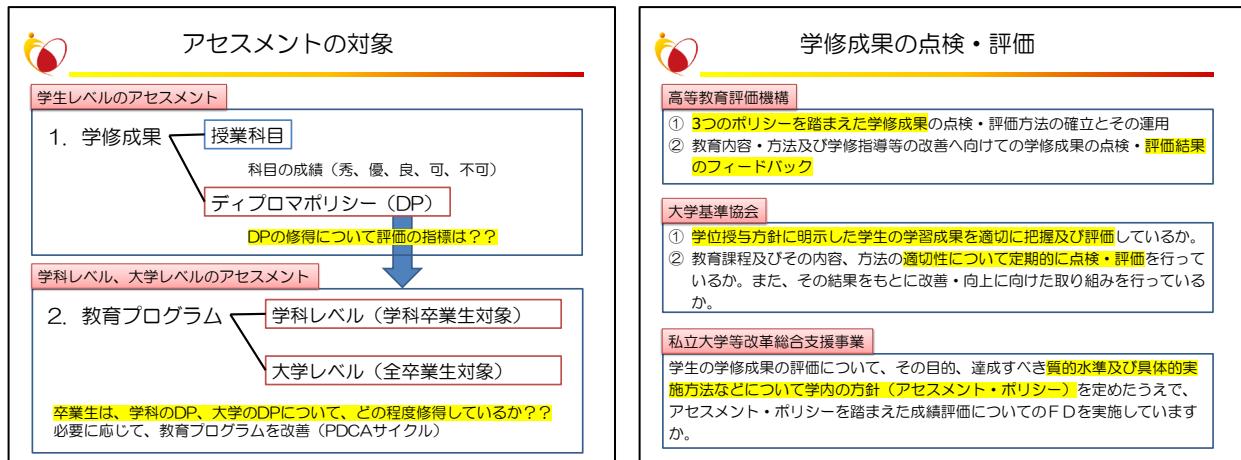
- 税理士 → 経済学部 税務会計学科 学生
- 公認心理士 → 人間文化 学部 心理学科 学生
- 建築士 → 工学部 建築学科 学生
- 管理栄養士 → 生命工学部 生命栄養科学科 学生 などがある。

実務家教員による授業の事例（1）

- ・産業界の技術者や研究者が現場の技術を実習形式で指導する授業。
- ・経営者や経営コンサルタントが組織行動論の観点で講義する授業。
- ・ジャーナリストや非営利法人関係者等が社会の構造的な変化について学生と対話を中心として行う授業。
- ・福祉や教育、カウンセリングの現場で様々な課題に直面している専門家がその経験を活かして専門職養成のために授業科目を担当している場合。

今後、シラバス作成時にはこれらの注意事項に留意し、学生により適切な情報を提供する必要がある。

第2部の佐藤教授の講演では、大学教育センター運営委員会で議論された全学アセスメントポリシーの策定とそれに基づいた各学科のアセスメントポリシーの策定状況、およびポリシーに従ったアセスメントの実施方法についての説明があった。アセスメントトライアルについては、平成30年度に終了したとの報告があり、平成31年度から学生レベルのアセスメントおよび学科レベル、全学レベルのアセスメントを本格実施する旨の説明があった。近年、学生の学修成果の可視化や教育プログラムの評価・改善について実施が求められている。本学でも平成31年度から本ポリシーを運用することにより、教育改善におけるPDCAサイクルをよりスムーズに回すことが可能となった。今後は、本格運用しながら本システムの問題点を改善し、教育改善を推進していきたい。





福山大学のアセスメントポリシー（学科レベルの評価）

2. 学科レベルの評価：学生が卒業時、学科の教育プログラムによって、「学科の学位授与の方針に掲げる資質」がどの程度修得できているか、「学科の学位授与の方針に掲げる資質の修得度アセスメント表（表1）」を用いて評価する。

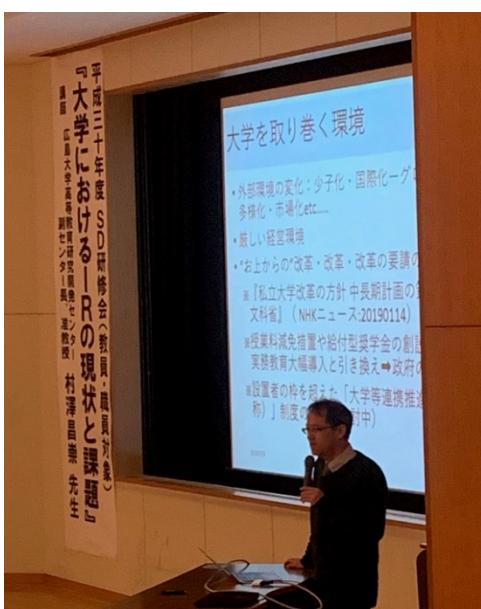
中項目ごとに教育プログラムの評価を行う→改善（PDCAサイクル）



福山大学のアセスメントポリシー（表3）：福山大学の卒業生は、どの程度太学の中項目を修得したのか

4 第4回 FD・SD 研修「大学とIR～現状と課題～」

平成 31 年 3 月 8 日（金）、平成 30 年度福山大学第 4 回 FD・SD 研修会が 1 号館大講義室（01101 教室）で開催された。今回のテーマは、「大学と IR～現状と課題～」で、154 名の教職員が参加した。講師として、広島大学高等教育研究開発センター准教授の村澤昌崇先生をお招きし、IR の現状と課題について、ご説明をいただいた。



村澤先生のご講演は、「大学を取り巻く環境」「IRとは：大学に求められる客観的分析評価機能」「IRと戦略・実践・評価・フィードバック（いわゆる PDCA）」「IRの課題：現場感覚・EBPMとの関連から」というテーマで進行した。「大学を取り巻く環境」では、外部環境の変化（少子化・国際化・多様化・市場化など）、厳しい経営環境、政府からの改革の要請等の近年における環境変化について説明され、大学におけるIR実施の必要性について解説された。「IRとは：大学に求められる客観的分析評価機能」では、現在、大学に求められているIRは、「客観性/体系性/持続性/専門性」を有するものであるとの説明があった。具体的にはそれぞれ「数値（客観的データを用いること）/入口～出口・教育研究管理運営（入学から卒業までを含めた教育研究全体を含むこと）/経年（一時的なものではなく継続的に分析すること）/専門的分析家・組織・情報システム（専門性を有すること）」として説明され、これらを考慮したIR活動を実施すべきであるとのことであった。「IRと戦略・実践・評価・フィードバック（いわゆるPDCA）」では、まず、多くの大学の現状について説明があった。現状においては、多くの大学がIRに関する形式（部署、人、受講証）は整えているものの、上記のIR活動を実質的に機能させているのかは疑問であることを指摘され、それでは実質的に機能させるにはどのようにすればよいのかという問題提起があった。眞のIRを機能的・効果的に運用するためには、まずは、教職員が当事者意識を持つことが必要で、「成功する組織」＝「自ら学習する組織」であり、そのような組織の構成員は、自身の職務を組織全体の中に位置づけているという。したがって、その構成員は組織の成果と自身の職務を構造的に把握しており、その状況を生み出すことがIR活動には重要であるとのことであった。ことについて、ログフレーム・ロジックモデルを例に解説がなされた。これは、最終成果とその指標だけに着目してIR活動をするのではなく、最終成果をもたらすプロセスについても評価の指標を作成してIR活動を実施するものである。「最終成果」を達成するためには、その下位にレベル1（最終成果達成のための条件）があり、レベル1の下位には、レベル2（レベル1を達成するための条件）があり、レベル2の下位には、レベル3（レベル2を達成するための条件）があるはずで、教職員はそれぞれのレベルにおいて業務を分担して行っているが、それぞれのレベルにおいて、目標・計画と指標を作成して活動状況を評価していく。

ただし大切なことは、全体像を見渡すことができるマネージャーが存在し、マネージャーを中心となって、全体として整合性のある目標・計画と指標を作成することであろう。各部署が個別に目標・計画を作っても全体に反映されなければIRとしての意味を持たない。



次に、大学にとって本質的に必要な具体的教育成果について解説され、機関レベルでは、「企業での有用性」「就職率」「在籍率」、プログラム・授業レベルでは「企業での有用性」「能力・技術習得」「興味関心の涵養」「満足度（授業・生活）」とのことであった。最後に、PDCAサイクルの功罪について解説があった。メリットとしては、自己点検評価において非常にわかりやすい考え方であるため、計画性を持って自己改善に活用できることが挙げられる。デメリットとしては、決まりきった業務では問題ないが、クリエイティブな業務では適切ではないとのご指摘であった。実際、世界的には普及しているとは言えず、企業ではすでに疑義が出ているとのことであった。その他、IR活動に関わる注意事項として、統計・調査に通じてない人が旗振り役をしているケースが多発しているとのことで、誤った方向に進む可能性に言及された。

今回のFD・SD研修会では、大学におけるIR活動の考え方、課題、問題点等についてわかりやすい説明をいただいた。IR活動は今後の大学運営に必須の活動であることを理解すると同時に、片手間でできる業務ではないことが十分に認識された。大学運営の全体像を把握し、アウトカムとして何を設定し、その目標達成のためには何段階のレベルを設定し、各レベルに適切なデータ収集と評価計画を立案・実施する必要がある。IR活動というものはなかなかわかりづらい側面を有するため、今回の「FD・SD研修会」は、IR活動の基本的考え方を理解するうえで非常に有意義なものであった。

5. 第5回 FD・SD研修「地域連携重視の福山大学ブランディング戦略」

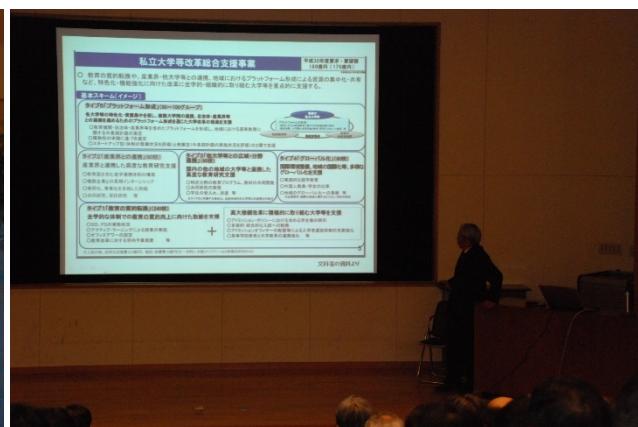
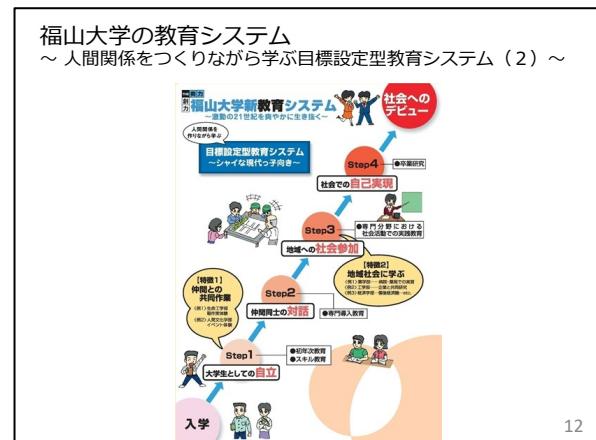
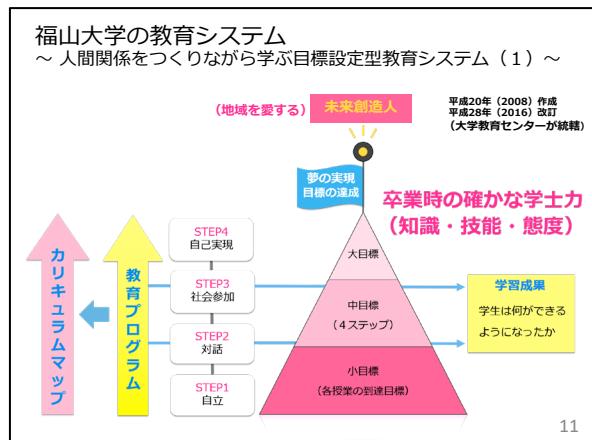
平成31年3月12日（火）、平成30年度福山大学第5回FD・SD研修会が1号館大講義室（01101教室）で開催された。今回は、福山大学松浦史登副学長から「地域連携重視の福山大学ブランディング戦略」というテーマで講演があり、198名の教職員が参加した。

まず、福山大学ブランディングとして、「大学としての目標」および「育成する人材像」について説明があった。すなわち、ブランディングとしての大学の目標は、「備後地域の地の拠点として、持続可能な地域創生に貢献する」ことであり、育成する人材像は、「全人教育を標榜する建学の理念に基づき、地域の中核となる幅広い職業人」である。そして、その人材像は、「未来創造人*」として具体的に定義されている。



未来創造人*：備後地域の産学官民連携を推進し、地域の教育資源を最大限に活用して人間性を高め、地域を愛し、地域で活躍し、地域から国際社会につながる人材

この未来創造人の育成は、「福山大学教育システム」の実践により成し遂げられる。本システムは、(1) 教育体制を全学的標準化すること、(2) 目標設定型であること、(3) 卒業時の確かな学士力を保証すること、(4) 教育プログラムの評価・改善体制を確立すること、という考え方から成り立っており、カリキュラムマップによる教育プログラムの可視化、アセスメントポリシーの確立、地域連携型アクティブラーニングの実践、地域に根差した教養教育科目やインターンシップの導入など、多くの実践事例に基づいて説明された。また、これらの目標を達成するためには、国による支援の獲得も重要である。私立大学等改革総合支援事業の現状と本学の対応・課題について説明があり、さらなる教育研究改革の推進が求められた。



福山大学研究プランディングについては、研究組織と地域連携、社会連携研究推進事業、全学研究プランディングテーマ「瀬戸内の里山・里海学」の設定、私立大学研究プランディング事業「瀬戸内海しまなみ沿岸生態系に眠る多面的機能の解明と産業支援・教育」とその成果等について説明があり、本学の地域創生への貢献と今後のさらなる展望が示された。



最後に、2020年に誕生する「未来創造館」の意義、位置づけについて説明があった。本館は、未来創造人の育成拠点として位置づけられ、1~3階の全学共通スペース、4~10階の薬学部の実験・研究スペース、11階の展望ラウンジスペースから構成される。全学共通スペースには、共同利用センター、ICTサービスセンター、アクティブラーニングスペース、新しい教育実践のための大講義室、コミュニケーションホワイエ、自分創造活動スペースなどが設置され、先進的かつ機能的教育設備が提供される。また、薬学部スペースでは、オープンラボ、スチューデントロビー、ティーチャーロビーなど未来創造人育成コンセプトに即した研究設備が提供される。この未来創造館を拠点として、未来創造人を育む全人教育が展開される予定である。



本研修会では、ブランディングの視点から、本学の歴史、実績、今後の明確なビジョンについて語られ、本学のミッションを再認識できる講演会であった。本学のミッション「地域の中核となる幅広い職業人の育成」のさらなる充実に向けて、今後も揺るぎなく前進していきたい。

6. 第6回 FD・SD 研修「ハラスメント自己チェック」

昨年同様、ハラスメントに関する全学 FD・SD 活動として、平成 31 年 1 月 15 日～平成 31 年 3 月 20 日の期間にセレッソを用いたハラスメント自己チェックが実施された。この自己チェックは、結果の集計を目的としたものではなく、教職員がハラスメントとなる具体的な行動を再認識するとともに、自己の行動を振り返り、今後の行動改善に活かすことを目的としている。セレッソ画面での説明文、自己

チェック項目を以下にテキスト形式で示す。

ハラスメント自己チェックリスト（教員用）

キャンパスにおいて、教育・研究・就労・就学が円滑に行われるよう、相互信頼に基づいた人間関係を築き、よりよい学内環境を維持することは、私たち教職員の務めです。キャンパス・ハラスメントとは、本学教職員・学生・関係者が、不適切な発言や行動をすることによって、相手の就学や就労上の環境を害したり、相手に不利益を与えることを言います。

ハラスメントを行うつもりはなくとも、知らず知らずのうちにしている場合があるかもしれません。あるいはまた、自分自身がハラスメントを受けたり、ハラスメントが行われている場面に居合わせることがあるかもしれません。

ハラスメントは、様々な人間関係の場において生じるものであり、何がハラスメントと見なされるかはその場の状況による部分があります。私たちがハラスメントについて改めて認識し、ハラスメントが起こらないキャンパス作りをめざす一助として、チェックリストを用意しました。

このチェックリストは自己点検のためのみに使用し、他の目的に使用することはありません。

大学教育センター／ハラスメント対応委員会

①本学の対応に関する項目

下記の（1）～（2）を読み、その内容を知りていれば「はい」と、知らない場合は「いいえ」と回答してください。

(1) 福山大学の「キャンパス・ハラスメントの防止等に関するガイドライン」がどこに記載されているかを知っている。（選択必須）

はい　　いいえ

(2) 福山大学のキャンパス・ハラスメント相談員は、ハラスメント対応委員とは役割が異なることを知っている。（選択必須）

はい　　いいえ

②ハラスメントにつながる態度

1. 下記の（1）～（25）を読み、その内容に当てはまるものにはチェックを入れてください。

- (1) 学生や他の教員は自分と目を合わせない。
- (2) 学生や他の教員は自分に対してビクビクした態度であることが多い。
- (3) 自分がいるときは、学生や他の教員同士の会話はほとんどない。
- (4) 学生や他の教員が自分の顔色を窺っているような雰囲気がある。
- (5) 最近の学生は、打たれ弱く根性が足りないと思うことがある。
- (6) 学生や他の教員が自分の言うとおりに動かなければ気がすまない。
- (7) 他の教職員から意見を言われたり、口答えをされたりするとイラッとする。

- (8) 厳しく指導することで年下の教員は育つと思う。
- (9) どんな場合であっても、上役の教員の命令に他の教員が従うのは当然である。
- (10) 大きな声で、断定的に話す。
- (11) 相手を横目でバカにしたように見る。
- (12) 相手が話しているときに大きなため息をつく。舌打ちをする。
- (13) 物を投げつけたり、ゴミ箱を蹴りつけることがある。
- (14) 人を褒めることが苦手だ。
- (15) 自分は短気で怒りっぽい方だと思う。
- (16) 特定の人の悪口や噂をみんなで話しても、本人に知られなければ問題ない。
- (17) 学科など所属部署内で、気楽に日常的な会話をすることができない。
- (18) 学科など所属部署内には、信頼して相談できる人がいない。
- (19) 上役の教員に対して、意見や反論が言いづらい。
- (20) 仕事は完璧にやるべきだ。
- (21) 仕事のためなら、私生活を多少犠牲にするのは当然だ。
- (22) 少少の体調不良くらいで仕事は休まない。
- (23) 休暇を取ることに罪悪感がある。
- (24) 周りの学生への学習効果も期待できるので、ミスを指摘する際には、なるべく大勢が見ている環境で行う。
- (25) 口頭で言うと怒鳴っていると言われるので、学生に詰問するような E メールを毎日のように送っている。

2. チェックを入れた項目の数を記入してください。

個

③ セクシュアル・ハラスメント

下記のような行動を本学キャンパス、または本学の関係者に関わるところで直接見聞きしたことがあるかをお聞きします。見聞きした項目には「はい」、したことのない項目には「いいえ」とご回答ください。ご自分がこれらの行為を受けたことも含んでお答えください。

- (1) 男性は所帯を持ってこそ一人前だ。女性は結婚して子どもを産んでこそ一人前だ、と発言する。(選択必須)

はい　　いいえ

- (2) 露出度の高い服装の女性は、セクハラに遭う原因を自分で作っている、と発言する。(選択必須)

はい　　いいえ

- (3) 他の教員や学生に「女性はこうするべき」「男性は・・・」と役割を押し付けている。(選択必須)

はい　　いいえ

- (4) 教員の立場としてではなく、個人的な感情で他の教員や学生を食事に誘ったりする。(選択必須)

はい　　いいえ

(5) 他の教員や学生の容姿や性格について批判的な発言をする。(選択必須)

はい　いいえ

(4) アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント

下記のような行動を本学キャンパス、または本学の関係者に関わるところで直接見聞きしたことがあるかをお聞きします。見聞きした項目には「はい」、したことのない項目には「いいえ」とご回答ください。ご自分がこれらの行為を受けたことも含んでお答えください。

(1) 教員としてのメールに、相手の個人的な事柄に立ち入ることを書いている。(選択必須)

はい　いいえ

(2) 学生の指導の際、激励しようとして、大きな声を出したり、怒鳴ったりすることがある。(選択必須)

はい　いいえ

(3) 学生の意見を聞かず、自分の考えを押し付けることがある。(選択必須)

はい　いいえ

(4) 「バカ」「クズ」「のろま」など屈辱的な言葉で学生を叱責する。(選択必須)

はい　いいえ

(5) 学生が課題や研究を進める上で必要な情報、指示を与えない。(選択必須)

はい　いいえ

(6) 特段の理由もないのに、特定の学生とコミュニケーションを取らず、指導をしない。(選択必須)

はい　いいえ

(7) ゼミ全体の食事会や飲み会に特定の学生を誘わない。(選択必須)

はい　いいえ

(8) 学生に私用を頼むことが多い。(選択必須)

はい　いいえ

(9) 「誰々に比べて」「昔に比べて」など、比較することによって学生に悪い評価を与える。(選択必須)

はい　いいえ

(10) 遅い時間まで長時間、学生を帰らせない。(選択必須)

はい　いいえ

(11) 学生に必要のない作業を強制的に課す。(選択必須)

はい　いいえ

(12) 学生や他の教員があいさつをしても無視し、会話をしない。(選択必須)

はい　いいえ

(13) ミスに対し、他の教員たちや学生たちの前で、強い口調で叱責する。(選択必須)

はい　いいえ

(14) 終業間際に他の教員に過大な仕事を課す。(選択必須)

はい　いいえ

(15) 休日や夜間に他の教員に仕事を課す。(選択必須)

はい　いいえ

(16) その人の能力や経験に見合わない、程度の低い業務、あるいは高すぎる業務を課す。(選択必須)

はい　いいえ

(17) 必要以上に仕事を監視したり関与したりする。(選択必須)

はい　いいえ

*ハラスメントチェック提出後は、コンテンツ欄の解説をご覧ください。

ハラスメント自己チェックリスト（職員用）

キャンパスにおいて、教育・研究・就労・就学が円滑に行われるよう、相互信頼に基づいた人間関係を築き、よりよい学内環境を維持することは、私たち教職員の務めです。キャンパス・ハラスメントとは、本学教職員・学生・関係者が、不適切な発言や行動をすることによって、相手の就学や就労上の環境を害したり、相手に不利益を与えることを言います。

ハラスメントを行うつもりはなくとも、知らず知らずのうちにしている場合があるかもしれません。あるいはまた、自分自身がハラスメントを受けたり、ハラスメントが行われている場面に居合わせることがあるかもしれません。

ハラスメントは、様々な人間関係の場において生じるものであり、何がハラスメントと見なされるかはその場の状況による部分があります。私たちがハラスメントについて改めて認識し、ハラスメントが起こらないキャンパス作りをめざす一助として、チェックリストを用意しました。

このチェックリストは自己点検のためのみに使用し、他の目的に使用することはありません。

大学教育センター／ハラスメント対応委員会

①本学の対応に関する項目

下記の（1）～（2）を読み、その内容を知つていれば「はい」と、知らなければ「いいえ」と回答してください。

(1) 福山大学の「キャンパス・ハラスメントの防止等に関するガイドライン」がどこに記載されているかを知っている。(選択必須)

はい　いいえ

(2) 福山大学のキャンパス・ハラスメント相談員は、ハラスメント対応委員とは役割が異なることを知っている。(選択必須)

はい　いいえ

②ハラスメントにつながる態度

1. 下記の（1）～（25）を読み、その内容に当てはまるものにはチェックを入れてください。

(3) 学生や他の職員は自分と目を合わせない。

(4) 学生や他の職員は自分に対してビクビクした態度であることが多い。

(5) 自分がいるときは、学生や他の職員同士の会話はほとんどない。

- (6) 学生や他の職員が自分の顔色を窺っているような雰囲気がある。
- (7) 最近の学生は、打たれ弱く根性が足りないと思うことがある。
- (8) 他の職員が自分の言うとおりに動かなければ気がすまない。
- (9) 他の職員や年上の人から意見を言われたり、口答えをされたりするとイラッとする。
- (10) 厳しく指導することで年下の職員は育つと思う。
- (11) どんな場合であっても、上役の職員の命令に他の職員が従うのは当然である。
- (12) 大きな声で、断定的に話す。
- (13) 相手を横目でバカにしたように見る。
- (14) 相手が話しているときに大きなため息をつく。舌打ちをする。
- (15) 物を投げつけたり、ゴミ箱を蹴りつけることがある。
- (16) 人を褒めることが苦手だ。
- (17) 自分は短気で怒りっぽい方だと思う。
- (18) 特定の人の悪口や噂をみんなで話しても、本人に知られなければ問題ない。
- (19) 所属部署内で、気楽に日常的な会話をすることができない。
- (20) 所属部署内には、信頼して相談できる人がいない。
- (21) 上役の職員に対して、意見や反論が言いづらい。
- (22) 仕事は完璧にやるべきだ。
- (23) 仕事のためなら、私生活を多少犠牲にするのは当然だ。
- (24) 少少の体調不良くらいで仕事は休まない。
- (25) 休暇を取ることに罪悪感がある。

2. チェックを入れた項目の数を記入してください。

個

③ セクシュアル・ハラスメント

下記のような行動を本学キャンパス、または本学の関係者に関わるところで直接見聞きしたことがあるかをお聞きします。見聞きした項目には「はい」、したことのない項目には「いいえ」とご回答ください。ご自分がこれらの行為を受けたことも含んでお答えください。

- (1) 男性は所帯を持ってこそ一人前だ。女性は結婚して子どもを産んでこそ一人前だ、と発言する。
(選択必須)

はい いいえ

- (2) 露出度の高い服装の女性は、セクハラに遭う原因を自分で作っている、と発言する。(選択必須)

はい いいえ

- (3) 他の職員や学生に「女性はこうするべき」「男性は・・・」と役割を押し付けている。(選択必須)

はい いいえ

- (4) 職員の立場としてではなく、個人的な感情で他の職員や学生を食事に誘ったりする。(選択必須)

はい　いいえ

- (5) 他の職員や学生の容姿や性格について批判的な発言をする。(選択必須)

はい　いいえ

④ アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント

下記のような行動を本学キャンパス、または本学の関係者に関わるところで直接見聞きしたことがあるかをお聞きします。見聞きした項目には「はい」、したことのない項目には「いいえ」とご回答ください。ご自分がこれらの行為を受けたことも含んでお答えください。

- (1) 職員としてのメールに、相手の個人的な事柄に立ち入ることを書いている。(選択必須)

はい　いいえ

- (2) 学生と接する際、激励しようとして、大きな声を出したり、怒鳴ったりすることがある。(選択必須)

はい　いいえ

- (3) 学生の意見を聞かず、自分の考えを押し付けることがある。(選択必須)

はい　いいえ

- (4) 「バカ」「クズ」「のろま」など屈辱的な言葉で学生を叱責する。(選択必須)

はい　いいえ

- (5) 学生が事務手続きを進める上で必要な情報、指示を与えない。(選択必須)

はい　いいえ

- (6) 学生や他の職員があいさつをしても無視し、会話をしない。(選択必須)

はい　いいえ

- (7) ミスに対し、他の職員たちや学生たちの前で、強い口調で叱責する。(選択必須)

はい　いいえ

- (8) 終業間際に他の職員に過大な仕事を課す。(選択必須)

はい　いいえ

- (9) 休日や夜間に他の職員に仕事を課す。(選択必須)

はい　いいえ

- (10) その人の能力や経験に見合わない、程度の低い業務、あるいは高すぎる業務を課す。(選択必須)

はい　いいえ

- (11) 必要以上に仕事を監視したり関与したりする。(選択必須)

はい　いいえ

*ハラスメントチェック提出後は、コンテンツ欄の解説をご覧ください。

この自己チェックが終了したのち、教職員はセレッソのコンテンツ欄の解説を読んで自己の振り返りを行った。コンテンツ欄の解説を以下に示す。

《解説》

チェックリストで見ていただいたように、ハラスメントの広い定義の中には主に、性的な事柄に関しての差別や不快感を与える行為であるセクシュアル・ハラスメント、教育・研究の場におけるアカデミック・ハラスメント、教員／職員相互の間でのパワー・ハラスメントが含まれます。

【ハラスメントに繋がる態度について】

②「ハラスメントにつながる態度」で 10 項目以上○があった人

今回のチェックを機会に、ご自分の日ごろの言動を見直してみましょう。怒りの感情をコントロールする、相手の立場に立って考えるなど、考え方を転換することも大切です。助け合ったり、話し合う雰囲気が乏しく、ギスギスした雰囲気の職場も、パワーハラスメントが起こりやすい職場と言えます。所属する部署・学科の様子について、スタッフ間でも振り返ってみましょう。ハラスメントとは何かを、同じ部署の構成員が共有できるようにしてください。

②「ハラスメントにつながる態度」で○が少なかった人

他者を尊重する姿勢について、高い意識を持っていらっしゃいます。その姿勢を周囲のスタッフともよりいっそう共有し、よりよいキャンパス作りに向けて引き続きご協力を願います。ハラスメントを受ける立場に置かれた場合は、できれば、相手に対してハッキリと「不快（嫌）である」ことを伝えましょう。うまく言えなくても、自分を責めないようにしましょう。一人で悩まずに、すぐに身近な人に相談するか、キャンパス・ハラスメント相談員に相談してください。他のスタッフや学生がハラスメントを受けていることを知ったときには、ぜひその人の力になってあげてください。見て見ぬふりをすることは、ハラスメントに加担していることになります。可能であればその場で注意しましょう。

【ハラスメントについて】

セクシャル・ハラスメントは、地位や権限を利用して相手に対する性的な言動を行い、不快感を抱かせることです。交際を強要したり、逆らうと不利益になる対応をしたりなどしていませんか？アカデミック・ハラスメントは自分の地位や権限を利用し、学生の権利を侵害することです。学習・教育・研究等に関わる場面において、地位や権限を利用した不適切な言動を行ない、学生の学習する権利の侵害や妨害をもたらすことです。

パワー・ハラスメントは、主に就労面に関して、優位な立場の者がその地位や権限を利用した不適切な言動を行ない、相手に権利の侵害や妨害をもたらすことです。

最後に、Eメールにも注意が必要です。Eメールの内容が相手を責めるような内容であり、それを毎日のように送り続けた場合は、指導教育の限度を超え、ハラスメントに当たる可能性があります。某国立大学の60代の男性教授が、数人の学生に対して威嚇する内容のメールを送ったなどとして休職6ヶ月の懲戒処分を受けました。大学によると、この教授は、20XX年2月から10月ごろにかけて、数人の大学院生が資料室の棚の場所替えをしたことに対して「勝手に棚を動かしたのは犯罪行為だ！」などと威嚇する内容のメールを送ったほか、大学院生を不当に批判する内容のメールを同僚など多くの教職員に送信しました。大学はこうした行為は学生に多大な精神的苦痛を与えるハラスメントに当たり、学業にも著しい支障を生じさせたとして、この教授を休職6ヶ月の懲戒処分にしました。

セクハラ、アカハラやパワハラをすることは、学生や他の構成員のパフォーマンスを低下させるだけでなく、自分自身の信用を低下させ、懲戒処分や訴訟のリスクにもつながります。

ハラスメントは当事者間だけではなく、他の構成員にも多大な影響を及ぼす問題です。また、組織による対処が不十分であれば、被害者がさらなる被害や不利益を被ることにつながりかねません。ハラスメントは人権侵害であることを理解し、キャンパスを構成している私たち教職員それぞれが、ハラスメント防止に向けた認識を高めていく必要があります。

福山大学では、ハラスメント防止および対応のために、ガイドラインを設けています。目を通して、ハラスメントがなくなることを一緒に目指しましょう。

福山大学キャンパスハラスメントの防止等に関するガイドライン

<http://www.fukuyama-u.ac.jp/info/disclosure/harassment.html>

参考文献

「飛翔法律事務所編（2014）. キャンパスハラスメント対策ハンドブック 経済産業調査会」

以上の内容について、教職員は自己チェックと解説から自分の行動について振り返りを行った。通常、人は日常的な行動について、意識的に客観視することは困難である。今回の振り返りをもって、何らかの気づきが得られ、行動変容につながれば幸いである。

7. 平成30年度福山大学学部・学科・大学院研究科のFD・SD活動報告

学部・学科・大学院研究科では、各組織の専門性や特性に合わせて、以下のFD・SD活動が実施され

平成30年度大学院研究科及び学部・学科SD研修開催記録（平成31年3月20日現在）

研究科・学部名・学科名	テーマ	実施回数	実施場所	実施日時	講師	参加人数	成果
経済学部	コンプライアンス教育	1	1号館3階第1会議室	5月23日（水）	尾田温俊	29名	研究不正防止などについて学び、コンプライアンス教育理解度テストを実施した。
人間文化学部・心理学科	AO入試選考基準について	2	29号館会議室	12月19日（水） 3月20日（水）	なし（入試委員の谷口先生から説明あり）	11名	心理学科独自のAO入試選考のためのループリックの作成
工学部・スマートシステム学科	学科予算計画に係る実験、実習のカリキュラム設計について	1	02205会議室	6月20日（水）	田中 聰	8名	3年次実験の方針の決定を行った。
工学部・スマートシステム学科	学科整備構想（予算構想）	1	02205会議室	7月4日（水）	仲嶋 一	7名	整備構想を策定した。
工学部・スマートシステム学科	授業評価アンケート総括	1	02205会議室	3月7日（木）	仲嶋 一	8名	学科の授業評価アンケート結果について、質問ごとに全体のスコア（全学、工学部）との比較検討を行った。
工学部・スマートシステム学科	H30年度自己点検報告	1	02205会議室	3月7日（木）	仲嶋 一	7名	自己点検評価書（案）の確認、修正を行った。
工学部・スマートシステム学科	H31年度自己点検計画	1	02205会議室	3月27日（予定）	仲嶋 一	未定	H31年度自己点検計画を作成する予定。
工学部・機械システム工学科	大学院への進学を回復させるには	1	32号館2F教室	3月13日（水） 13:00～14:00	なし（司会進行：内田）	10名	2件の文献を新たあらかじめ読んだうえでテーマの課題について議論を交わした。3年生向けの進学ガイダンスを開催するなど、今後実施すべき具体案をまとめた。
工学部・情報工学科	授業評価アンケート結果に基づく授業改善	1	04202	3月5日（火）	参加者全員	8名	授業科目間のスキル依存関係が明らかになり、改善を図ることになった
工学部・情報工学科	新入生アンケート結果を受けたFD	1	04202	5月9日（木）	参加者全員	9名	定員充足を達成するため、学科をどのように改善すべきかの情報を得ることができた
生命工学部・生命栄養科学科	学科の現状の分析（SWOT分析）	2	18号館セミナー室	6月21日（木） 7月26日（木） 17:00～	菊田安至 田中信一郎	16名	長期ビジョン委員会第六部会から要請により実施した生命栄養科学科のSWOT分析の過程と成果を学科で共有した。
生命工学部・生命栄養科学科	臨地実習・学外実習に参加している学生の安全対策	1	18号館セミナー室	9月26日（水） 17:00～	石井香代子	8名	7月の豪雨災害を経験して、今後学外へ実習に出る学生の安全をどのように確保するのかを確認し、対応フローチャートを作成した。
生命工学部・生命栄養科学科	成績管理について（新Zelkovaでの確認方法）	1	18号館セミナー室	3月12日 16:00～	村上泰子	16名	Zelkovaの更新に伴い履修状況の確認方法が刷新され、削除された機能もある。新Zelkovaによる成績の確認方法について、30年度の事例を通して考えた。
生命工学部・海洋生物科学科	1学年130名を収容するための学科体制の構築（学生実験の運用、施設）	3	16号館・図書セミナー室	7月23日（月） 10月11日（木） 11月26日（月） 三輪、高村、倉掛、高田、北口、渡辺、阪本、山岸、真田、水上		7～10名	1年生および2年生の学生実験の担当者、実施内容を作成した。
生命工学部・海洋生物科学科	1学年130名を収容するための学科体制の構築（因島キャンパス増改築）	2	16号館・図書セミナー室	11月29日（木） 1月16日（水） 有瀧、三輪、阪本、水上、真田、山岸、渡辺		7名	因島キャンパス増改築案（施設・設備等）を作成した。
生命工学部・海洋生物科学科	内海生物資源研究所の水族館の管理運営業務について	1	内海生物資源研究所	3月5日（火） 有瀧、真田、水上、黒澤		4名	2019年度の年間スケジュール案および水族館の運営目標・計画を策定した。

た。

薬学部・薬学科	薬学教育評価機構第2期薬学教育評価基準に関する説明の伝達講習会	1	薬学部会議室（34号館3階会議室）	6月8（金） 16：20～18：00	佐藤英治	44名	平成30年3月20日に日本薬学会長井記念ホールにて開催された第2期の評価基準に関する説明会DVD映写及び伝達により、本薬学部における評価を受けるための情報を教職員で共有した。
薬学部・薬学科	薬学科の入学定員を充足するためのSWOT分析（1回目）	1	34号館 34201教室および模擬病棟A～E	6月22日（金） 16：30～17：45	佐藤英治	44名	薬学科の強み、弱み、機会、脅威を抽出し、積極化戦略、段階的発展差別化戦略、撤退戦略を考えた。
薬学部・薬学科	薬学科の入学定員を充足するためのSWOT分析（2回目）	1	34号館 34201教室および研修1(SGD)	7月27日（金） 16：30～17：45	佐藤英治	33名	薬学科の強み、弱み、機会、脅威を抽出し、積極化戦略、段階的発展差別化戦略、撤退戦略を考えた。
薬学部・薬学科	福山大学薬学部臨床実習後OSCEの実施について	1	薬学部会議室（34号館3階会議室）	11月2日（金） 16：20～17：00	田村 豊	47名	7月31日に実施されたPCC OSCEトライアルの結果を元に作成されたDVDにより説明が行われ、理解を深めることができた。
薬学部・薬学科	学生との双方向のコミュニケーションと自主的な研究活動を促す教育指導について	5	薬学部会議室（34号館3階会議室）	10月11日（木）～11月27日（火）	山下 純	1名	大学教員の教育能力を高めるための実践的方法（Wikipediaより）」について学んだ
薬学部・薬学科	改訂コアカリに準拠した実務実習への対応	1	薬学部会議室（34号館3階会議室）	2月14日（木） 10：30～11：00	佐藤英治 広瀬雅一	44名	瀬先生から、実務実習の運用方法および新ゼロックスシステムについて資料によって説明され、改訂コアカリによる変更点等について意見交換した。
大学教育センター	授業研究「人文地理(2)」	1	01103	11月21日（水）	小原友行	11名	授業者のみならず、研究授業の参観、その後の検討会での議論を通じ、参加者各自の授業改善に役立った。
大学教育センター	授業研究「ヨーロッパの歴史と文化2」	1	01203	11月29日（木）	村上 亮	8名	授業者のみならず、研究授業の参観、その後の検討会での議論を通じ、参加者各自の授業改善に役立った。
大学教育センター	授業研究「教職実践演習」	1	01204	12月4日（火）	竹盛浩二	6名	授業者のみならず、研究授業の参観、その後の検討会での議論を通じ、参加者各自の授業改善に役立った。
経済学研究科	福山大学大学院の教育・研究等に関するアンケート集計結果	1	1号館3階 第1会議室	2月13日（水）	春名章二	14名	大学院生の現状と課題について、討論を行った。
人間科学研究科	福山大学プランディング戦略と研究プロジェクトについて	1	29号館コミュニケーションルーム	8月28日（火） 16:00～17:30	仲嶋一 研究担当 学長補佐	10名	福山大学プランディング戦略における人間科学研究科の研究の位置づけについて、研究科の教員で共通認識を形成するために、研究担当学長補佐である仲嶋先生に話題提供をしていただき、それを受け討議を行った。
人間科学研究科	成績評価のあり方について	1	1号館5階第3会議室	11月14日（水） 研究科委員会・メールでの情報交換	特になし	10名	具体的な評価方法（評価の観点や得点化、またはループリック評価）について情報交換を行い、共通認識を形成する一助とした。
薬学研究科	医の倫理	1	34号館 34202講義室	6月28日（木） 14：40～15：55	田中信一郎（生命栄養科学科教授）	58名	医療における倫理問題についていろいろな角度からの話を公聴した。

